「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局　〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 ／TEL 045-774-9861
洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表　中條 智子
●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」（ubumwe）とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

新型感染症の時代に平和を創ることの意味

「信頼」を通した「平和」の再考

奥 本 京 子
おくもと　きょうこ

大阪女学院大学教授。日本平和学会理事。

新型コロナ感染症に支配される現在、われわれは何をどう捉え直して生きていくべきか。これは、きっと、皆が持っている疑問の一つだろうと思います。経済優先か自粛生活か。人間のための便宜か、自然の保護か。恐怖か過小評価か。独裁か自由か。マスクを着用するか、着用しないか、に至ってまで、ときには喧々諤々の論争になっているようです。そして、新型コロナウィルスの管理については、支配的な政治で完全制御を目指す、感染者数をごまかしてウヤムヤにしてしまう、などといった各国・各地域いろいろな対応が見て取れます。

そんな中、台湾やニュージーランドでの第一段階における政府による対応については、全般的に成功と評価されているようです。その根幹には人々の政府に対する信頼醸成があるとの報道を時々耳にします。新型コロナが猛威を振るう長い時間の中で、それらの政府のリーダーたちは、直接人々に話しかけ、恐れずに質問を受け、応答し、具体的な考え方を示し・・・を繰り返してきた模様です。一方的にすべての機能をシャットダウンし管理・支配するのでもなく、ずるずるとごまかし続けるわけでもなく、それは、一朝一夕で手に入れられるようなものではない、相互に時間をかけて忍耐をもったプロセスであったようです。苦労・工夫して一緒に生活を営み、生命を大事にする、そのプロセスそれ自身の中に、信頼が徐々に生まれていったのでしょう。

■　ルワンダに訪れる機会を得たのは、2019 年 5 月、ゴールデンウィークを活用してのアイ・シー・ネット株式会社のスタディーツアーでした。これは佐々木萌さんによって企画されたもので、筆者は学びのプロセスをファシリテートする役としてそのツアーに同行させて頂いたのでした。萌さんと初めて出会ったのは、2013 年、ピースボートによる「東アジアユースピースダイアログ」というイベントでした。ファシリテーターとして同行したこの数日間のイベントは、第 79 回ピースボート地球一周の船旅の一部に組み込まれ、横浜と香港区間を洋上で過ごしつつ、若者たちと平和のトレーニングをしながら平和の発信をする

というもので、萌さんはその参加者のうちの一人でした。その後、私が運営委員長を務めていたナルピ（東北アジア地域平和構築インスティテュート、NARPI）のコリア事務所において働いて下さったり、現在の会社でのピースビルディングのプログラムに招待してもらったりと、大変お世話になっている、大事な若い友人です。

そんな語り切れない繋がりから、萌さんにとってもとても大切な実家のあるルワンダへのスタツアが企画されると聞き、また、同行ファシリテーターとして招いて下さったとき、私の中には何かとても嬉しいものが溢れた記憶が蘇ります。考えてみれば出会ってたった数年に過ぎないわけですが、その中でいろいろな折にご一緒する機会に恵まれ、ルワンダの話を少しだけ聞いたりもしていました（別途、佐々木和之さんのご活動については、NHK のドキュメンタリーなどで学ばせていただいておりました）。「ラッキー！憧れのルワンダにお仕事で訪問できる！」といったミーハーな下心があったことは否定できませんが、何といってもそのルワンダで学ばせていただける機会を頂戴できたこと、また、それほど大事なお仕事を任せてもらえるまでに萌さんに信頼していただけたということが、少々驚きでもあり、大きな喜びでもあったわけです。

私が里帰りするわけでもないのに、浮足立って辿り着いたルワンダには、ドキュメンタリーの中で佐々木和之さんや恵さんの姿を通して垣間見た世界の延長がありました。家族皆で移住してからもうすぐ 15 年という長い時間をかけて関わってこられたルワンダの人々の目に、このお二人はどう映っているのだろうという興味関心も持参しました。

筆者がルワンダで実施した
平和構築ワークショップの一コマ

■　ソーシャルディスタンスなる言葉が新しい常識になっている今、またロックダウンや自粛との概念が幅広く浸透してしまった今、私たちは、他者と距離を取ること、自身を孤立化させること、関係性を分離・分断すること、を「良いこと」としています。確かにウィルスを寄せ付けないためにも、自身や大事な他者、またコミュニティ・社会の人々の健康を守るためにも、これは重要であることは間違いありません。

「セキュリティ」との言葉は、「安全保障」などとも翻訳されますが、そもそもラテン語では、心配・不安から自由であることを意味しました。これが社会におけるセキュリティの意味から、国家間の安全保障を指すことが多くなったのは、相互確証破壊(Mutually Assured Destruction、MAD)が抑止力として広く信じられた冷戦時代だったわけです。私たちの現在も、他者を（そしてウィルスを保持しているかもしれない自身をも）疑い、距離を取り孤立する、といったことが奨励される（「自粛警察」なんていう恐ろしい言葉も生まれました）、そんな時代になっています。本来は心配や不安から自由であることを求めているはずなのに、皮肉なことに、不安と恐怖に駆られて自分の領域に閉じこもって誰も信じないといったことが、セキュリティであり、それが一つのビリーフ（信念・確信・信仰）になりつつあります。

■　第二次世界大戦末期、1945 年のドイツの降伏直前にナチスの強制収容所で刑死したキリスト教神学者、ディートリヒ・ボンヘッファーは、平和が如何にして実現するのかについて、次のような言葉を残しています。

「いかにして平和は成るのか。政治的な条約の

体系によってか。いろいろな国に国際資本を投資することによってか。すなわち、大銀行や金の力によってか。あるいは、平和の保証という目的のために、各方面で平和的な再軍備をすることによってであるか。違う。これらすべてのことによっては平和は来ない。その理由の一つは、これらすべてを通して、平和（Friede）と安全（Sicherheit）とが混同され、取り違えられているからだ。安全の道を通って＜平和＞に至る道は存在しない。なぜなら、平和は敢えてなされねばならないことであり、一つの偉大な冒険であるからだ。それは決して安全保障の道ではない。平和は安全保障の反対である。安全を求めるということは、[相手に対する] 不信感を抱いているということだ。そしてこの不信感が、ふたたび戦争をひきおこすのだ。安全を求めるということは、自分自身を守りたいということである。」

ここで翻訳されているドイツ語、”Sicherheit”は、英語の security に相当します。ボンヘッファーは、当時の社会において「平和」と「安全保障」の概念が取り違えられていると指摘します。安全保障という道によっては決して平和に到達できないというわけです。安全保障を追求するということは、相手に対して不信の念をもつことを意味するからであり、不信が戦争を生み出すからなのです。

■　私たちの社会・世界において、不信が支配し、分断し・されることが良いことになりつつある今、これが現実的なこととして常識化し、定着してしまうことは、実はとても怖いことです。私たちは依存しあって、助け合って生きています。自粛生活は、目に見えにくいところで自身のセキュリティーを犠牲にしている人たちの文字通りの献身的な働きに支えられています。「自立した人間」なんて言うけれど、そんな人、本当の意味では一人もいません。

スタディーツアーで訪れたルワンダには、実質的な信頼と平和がありました。ルワンダ全体においてはほんの小さな試みに過ぎなくても、私にはとてつもなく大きく大切な先駆的なモデルケースに見えました。そこには、紛れもなく、ルワンダの人々の、佐々木夫妻に対する厚い信頼があり、平和を創りだす双方向の営みがありました。大学生に誠実に向き合って近い将来に平和ワーカーとして働こうとする若い世代を生み出す努力、小さな村におけるコミュニティの中の信頼構築、加害と被害の大きな壁を共に超越しようとする女性たちの和解の試み、などの一つひとつに胸を深く打たれたことを、いま、新型コロナのただなかに生きながら、思い起こしています。

私たちは、この時代において、自身を、他者を、そして関係性を大切にし、豊かに醸成していく努力を惜しんではならないでしょう。そこには、新しい着想や創造性が求められることでしょう。私のささやかな毎日は、平和を創るための学びやトレーニングを、オンラインを介してであっても、想像力を駆使して、独創的に工夫して、毎日提供することだと考えています。一つひとつの自身の活動を、他者と交わりながら、問い返し、作り直し、小さな歩みを進めていきたいと願っています。そして時が来たら、やはり体感・体験し続けたいものです。ルワンダの赤い土の匂いを感じながら、人々の気配・息遣いに触れながら、その場――時間と空間――の中でこそ、全身で学ぶことがようやく可能であったと思うのです。ある人は何らかの菌にやられ体調不良でありながら、ある人は持参した大きな疑問や自身の過去の体験と格闘しながら、ある人は涙を流しながら、その場において体験させていただいたルワンダのスタツアの意義を、今だからこそ深く噛みしめています。

参考文献：ディートリヒ・ボンヘッファー『告白教会と世界教会　新教セミナーブック 38』森野善右衛門訳、新教出版社、2011 年、pp. 138-139.
これは、1934 年、デンマークにおけるファネー協議会―世界教会会議の準備のために開催された会議―での平和講演におけるものである。

コロナ禍が続くルワンダからの報告

佐々木 和之
ささき　かずゆき

皆さまこんにちは。日本でコロナ感染者が再び急増していることを憂いつつ、日々を過ごしています。ルワンダも引き続きコロナ禍の影響を大きく受けています。

最近のビッグニュースは、昨日（８月１日）キガリ国際空港の運行が約４カ月ぶりに再開したことです。今年は10年ぶりに長期休暇を計画し、空港の運行再開を待っていたのですが、渡航を希望していたアメリカや日本の状況が改善する様子が見られないため、延期することにしました。３月下旬以降、ほぼ毎週オンラインでの授業が続き、疲れが溜まっていますので、国内でしばらく仕事から離れ、ゆっくりしようと思っています。

空港再開からも分かるように、ルワンダ政府は、３月下旬から５月下旬に実施したロックダウンにより大きく落ち込んだ経済の回復へと舵を切りました。同時にPCR検査の拡充と感染者の隔離の徹底、夜間外出禁止、学校閉鎖、集会の禁止、公共の場での手洗い、マスク着用、ソーシャル・ディスタンスの義務化といった措置を継続し、感染拡大の抑え込みを図ってきましたが、過去２カ月ほど感染者が増え続けています。６月初旬に300名程度だった累計の感染者が、８月１日現在、2022名に増加。隔離入院している患者数も120名から900名以上に激増しています。しかし、死亡者が５名と比較的少ないことや重症患者もごく少数ということなどから、国民の間でコロナウィルス感染への危機感が薄らいでいることが心配です。

９月に予定されている大学の再開も、来年以降に持ち越される可能性が高まってきました。計画していたことが次々と中止や延期に追い込まれてきた失望も大きいですが、来月のことすらはっきりとは決められないことがストレスの要因になっているようです。対面の授業がいつ始まるのか？今年度をいつ終えることができるのか？いつ卒業式が開かれるのか？留学をいつ開始できるのか？学生たちも、教職員たちもこれらに対する明確な答えを得ることができないまま過ごしていかなければなりません。減給になったり、親からの仕送りが途絶えるなどして困窮する同僚たちや学生たちも少なくありません。どうかルワンダに生かされている私たちが、この苦境がただ過ぎ去るのを待ちわびるだけではなく、お互いを思いやり、祈り合い、助け合い、喜びや悲しみを分かち合いながら、今日一日一日を過ごしていくことができますようにお祈りください。私たちも皆さまのことを覚えて祈ります。

寮で生活を続ける留学生

今号は紙面が限られていることもあり、三点だけ短い報告をさせていただきます。まず初めにウムチョ・ニャンザについて嬉しいニュースをお伝えします。彼女たちの作品である色彩豊かな木綿布で作ったバッグ、エプロン・マスク・ヘアバンドのセット、ブックカバーをカタログ販売させて

作品のカタログに見入る女性たち

いただくことになりました。今年は長期休暇のために秋から冬にかけての帰国報告活動を行わないということから、女性たちの作品を例年の様に日本で販売できないことに頭を悩めていました。女性たちの収入がコロナ禍の影響で落ち込んでいることもあり、何とかできないかと検討した末に踏み出した大きな一歩です。日本人留学生の桂川睦美さんが中心になって作成したカタログを、次号には皆さまのもとにお届けいたします。ご協力をよろしくお願いいたします。

次に、７月中旬、キレヘ郡にある二つの養豚協同組合を５カ月ぶりに訪問しました。ルガンド村の組合は豚の飼育が好調で、昨年末に収益金で1500 坪の農地を購入しました。今はその土地にサツマイモを栽培していますが、組合代表のエドワードさんは、「８月中には食用バナナの苗を植え付ける」と張り切っておられました。カヴゾ村の組合は、この一年の間に豚の病気が四回も発生したことから、養豚を継続するのか、他の活動に切り替えるのか、苦渋の選択を強いられつつあるとのことでした。養豚事業の経営に関して二つの組合の間で明暗が分かれている状況ですが、両村とも今年は作物の収穫が良好で、コロナ禍の悪影響も思っていたほどでないことが分かり一安心しました。

最後に、７月 20～22 日と７月 31 日～８月２日、「暴力に代わる手立て」プログラム（Alternative to Violence Program）上級コースのワークショップを実施しました。３月下旬に大学が閉鎖されて以降、私たちが初めて実施した対面での教育活動です。普段は講師以外に一度に 20 名程度が参加するのですが、政府から許可されている最大の人数が 15 名であることから、参加者 10 名ずつのワークショップを二回実施しました。感染予防のため、握手やハグなどは厳禁、マスクを常時着用し、参加者同士の距離を大きくとりながらでしたので、少しぎこちなさも感じながらでしたが、約４カ月ぶりに再会した学生たちは、共に学ぶことのできる喜びを噛みしめているようでした。

養豚協同組合が購入した農地を訪ねて

私の人生を変えた平和構築学

ゴレティ・カニャニャ

PIASS 平和紛争研究学科最終学年

私の祖父と祖母は 1959 年に起きた騒乱で迫害を受け、ウガンダに逃れて難民となったルワンダ人です。私はウガンダで生まれ育ちましたが、夫と共に 2011 年にルワンダに移住しました。子育てが少し落ち着いて学業を再開する状況が整った 2017 年、PIASS の平和構築コースのことを知

り、その名前にとても惹かれて入学を決めました。母親として、キリスト者として、そしてルワンダ人として、平和のために何かしたいといつも願っていたからでした。あれから３年が過ぎ、この平和構築コースの学びが、私の人生を変えたと実感しています。

特に「和解の理論と実践」の授業を通し、私は、それまで全く知らなかった現実を突きつけられるとともに、ジェノサイド後の和解のプロセスを歩む人々の経験から大きなチャレンジを受けたのです。そして、私は以前とは全く違う物の見方をするようになったのでした。私の両親は、私が子どもの頃から何度となく、フツの人々が彼らを祖国から追い出したこと、そして、その同じ人々がジェノサイドを犯したのだと私に言い聞かせました。ですから、私はフツの人には誰であれ否定的な感情を抱いていたのです。しかし、その授業を通し、私はフツの人々すべてが悪人なのではないこと、そして、フツの人々の中にもツチの人々によって心理的な傷を負わされてきた人々がいることを納得したのでした。

この授業の中で、ジェノサイドとジェノサイド後の和解に関する私の認識を一新することになった、決して忘れることのできないことがありました。その一つは、平和紛争研究学科の卒業生である女性との出会いでした。彼女は、授業の中で彼女自身の痛ましい経験について話してくれました。それは、フツである彼女の父親が、病床に伏していたために虐殺には加担しなかったのにも関わらず、ツチの人々によって殺されたという証言でした。彼女がまだ小学生だった当時、彼女の父親が虐殺を生き残ったツチの人々に拉致され、そのまま帰らぬ人となりました。彼女は父親を裸にし、縄で縛って連れ去ったそツチの人々の顔をはっきり憶えていると言いました。しかし、彼女はその後、様々な困難の中を潜り抜けた末にツチの男性と結婚し、今は幸せな家庭を築いています。そのお相手は、ジェノサイドで家族を皆殺しにされた虐殺生存被害者なのです。

PIASS の学生とゴレティさん（右から二人目）

彼女の証言は、ルワンダ人の経験が非常に複雑で単純化できるものではなく、その人が誰であるかに関わらず、傷と痛みを負っていることを示しています。彼女の証言、そして和解の授業を通し、私はある一方の集団を悪と見なし、もう片方の集団を善と見なすという考え方が誤りであることを理解しました。どのような集団に属していようと、良い人もいれば悪い人もいるのは当然のことです。しかし、私はその誤りを犯していたのです。

二つ目は、キレヘ郡の方々が授業で証言をしてくださったことです。その中の一人は、頬に大きな傷のある女性でした。そして他の二人は、驚いたことに彼女を襲撃した加害者の男性たちだったのです。その三名の証言者は、彼らが歩んできた和解への道のりについて私たちに語りました。その女性が隣に座っていた男性たちを心から赦していると明言した時、私は心が揺さぶられました。私は今も「彼女がどのようにして彼らを赦せたのだろう」と自分に問いかけています。しかし、彼女が今、自分を殺そうとした者たちと平和に暮らしていることは紛れもない事実なのです。キレヘの方々との出会いを通し、私は赦しの力を知りました。赦しがどのように心の平安を回復し、他者と平和に暮らすことを可能とするのかを学んだのです。

私はその授業を通して、７名の虐殺生存被害者である女性たちと７名の虐殺加害者の妻である女性たちが共に活動するウムチョ・ニャンザのことを知りました。彼女たちは過去を乗り越え、洋裁の訓練を受けた後、共にバッグやポシェットなどの製作に励んでいます。私は以前、虐殺被害者の女性たちが、家族を殺害した者たちの妻である女性たちと共に働くことなど想像すらできませんでした。彼女たちの活動に興味を持ち、彼女たちがどのような取り組みをしてきたのかを知りたいと思い、「和解プロセスにおける虐殺加害者の役割」というテーマの卒業論文研究で、彼女たちから聴き取り調査をすることにしたのでした。

先日、その調査結果をようやく卒業論文としてまとめ、PIASS の開発学部に提出しました。調査から明らかになった「加害者の妻たちの役割」として、以下の三つのことについて論じました。まず第一は、加害者の妻たちが、加害者側の家族と被害者側の家族の橋渡し役になっているということです。夫が加害者であっても、本人自身は虐殺に直接加担しなかった者として、彼女たちには両者の和解を執りなす役割があるのです。刑務所にいる夫の代わりに被害者に謝罪することは、その具体例と言うことができます。

第二は、彼女たちは母親として子どもたちを和解に向けて教え育てる役割を果たしているということです。加害者である父親を持つ子どもたちの中には、なぜ自分の父親が刑務所に入れられているのか、きちんと教えてもらっていない者たちが多いのです。近隣の人たちから吹き込まれ、父親を告発した被害者たちに恨みを抱く子どもたちも少なくありません。将来恨みを抱いた子どもたちが大人になり、新たな紛争が繰り返されないためにも、母親である彼女たちが彼らに真実を伝え、加害者の家族として和解への務めを果たすようにと励ますことは、とても大切なことなのです。

彼女たちが果たしている第三の役割は、ジェノサイド後のルワンダ社会に強固に存在する社会的な境界線を自ら乗り越え、周りの人々の模範となることです。彼女たちは、この境界線ゆえに一般の人々がタブーとすることをしてきたのです。例えば、虐殺加害者の妻である女性たちが、自ら進んで虐殺犠牲者の追悼集会に参加しました。これは、加害者側の家族からも被害者側の家族からも受け入れがたいことでした。その行為は、被害者側の家族からは侮辱として、加害者側の家族からは裏切りとして見なされてきたことなのです。しかし、虐殺被害者の女性たちと親しくなった彼女たちは、勇気を出して越境者として歩んできたのです。

ウムチョ・ニャンザの女性たちは、これまで多くのことを共に成し遂げ、お互いに強い絆で結ばれています。その証拠として、お互いの間に誤解が生じた時などは、以前のように二つのグループに分かれて対立するのではなく、きちんと話し合って問題を解決しています。彼女たちは今や、お互いを信頼し、一緒に安心して居ることができ、様々な形で助け合う姉妹のような関係になっているのです。

平和構築コースでの学びにより、私自身が大きく変わりました。既に述べた通り、私は以前フツの人たち全てに否定的な感情を抱き、彼らを邪悪な人たちだと見なしていました。しかし、今は違います。私は全ての人と平和に暮らすために、このコースで学んだ知識と技能を用いていこうと思います。自分自身が心の平安を保ち、人々と平和に暮らすために、私は他者に赦しを乞い、また他者を赦すことのできる者になるよう、できる限りのことをしていきたいです。なぜなら、私はキレへの人々から、赦しは悪いものを良いものに変容する力があることを学んだからです。

私はこのコースで学んだことを教会でも用い

ていくつもりです。教会の兄弟姉妹が、地域社会、教会、家庭での“いさかいごと”に平和的に対処していくことができるよう、非暴力コミュニケーションや非暴力紛争変容について学んだことを分かちあっていきたいのです。そして、卒業後にNGO などで地域社会開発や貧困削減の仕事に就くことができれば、「平和と紛争に敏感な開発支援アプローチ」等を紹介し、支援活動が紛争を引き起こすことがないように努めつつ、地域社会の平和構築にとってより良い活動ができるようにしたいと思います。

（翻訳：佐々木和之）

事務局からのお知らせ

- 8 月から予定していた佐々木さんの長期休暇は延期となりました。佐々木和之さんと恵さんの心身の健康が守られますようにお祈りください。
- 現在の活動を分かち合うために、下記の通りオンライン報告会を計画しています。ぜひ、ご参加ください。
- 2019 年度は支援金が約 850 万円（例年は約 900 万円）でした。財政がひっ迫しています。ぜひ、支援会へのご入会、また一時的な支援金のご送付など、これまでと変わらぬ祈りとご支援をお願いいたします。
- 「ピースビルダー育成プロジェクト」（目標 100 万円）のお願いも継続しています。平和構築を担う若者たちを育てるために、ご協力をお願いいたします。振替用紙に「育成支援」と明記してお送りください。

●　「ウムチョ・ニヤンザ」の製作品カタログ準備中！　次号案内予定

毎年、佐々木さんの帰国時に、ウムチョ・ニヤンザの方々が製作したブックカバーやバックなどを販売してきました。これは、製作者の貴重な収入源になるだけでなく、近隣の国々から PIASS に留学する学生への奨学金となっています。今年は、各地で販売できないため、ぜひ皆様にお買い求めいただきたく、カタログを準備しています。次号発送時にカタログを同封いたします。

＜　オンライン報告会　＞　「平和構築を担う若者たちに見る希望」

今年は、佐々木和之さんの帰国報告会を、各地を訪ねて開催することができません。そこで、オンラインで報告会をおこなうことにいたしました。ぜひ、ご参加ください。詳細は別紙案内参照。

日時：　２０２０年　９月２４日（木）１９：３０～２１：００

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。

●郵便振替口座　00250-0-112907　佐々木さんを支援する会●

●佐々木さんを支援する会ＨＰ（ホームページ）

http://rwanda-wakai.net/

佐々木さんの活動報告、写真館、等。ＨＰから入会手続きも可能です。 佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

●世話人会　中條智子（長住教会牧師）、加藤　誠（大井教会牧師）、播磨　聡（広島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、米本裕見子（日本バプテスト女性連合幹事）